

刊行のことば

このたび、日本農業研究所客員研究員（東京大学名誉教授）八木宏典先生を主査として、研究を重ねてきた「水田農業のあり方に関する研究会」の報告を『21世紀水田農業の変貌と課題』として刊行する運びとなった。八木先生をはじめ委員の各先生方のご労苦に対し心から感謝申し上げたい。特に、委員として外部から参加頂いた先生方は、研究の最前線にあり、また、所属機関の研究の担い手として、大変お忙しいのにもかかわらず、委員会に出席され、ご報告や議論をして頂くとともに、分担して、報告書のご執筆をして頂いた。

2015年農林業センサスにおいて稲作部門に関し構造の大きな変化が報告されるという状況の下で、米に関し行政による生産数量目標の配分の廃止方針が打ち出され、並行して稲作等水田作に関する国の補助金によるインセンティブの大きなギャップを伴う変更が行われるなど水田農業をめぐる政策の枠組みが変化する中で、全国津々浦々で稲作の担い手問題が着実に深刻度を高めている。

国民の皆さんの中には、稲作を含め我が国の水田農業がどこに向かおうとしているのか、米とともにあるふるさとの田園の風景がどのようになるだろうかと関心を持たれている方が多いと思われる。このようなときに、水田農業を巡る幅広い論点に関しこのような研究報告書をまとめられたのは時宜に叶い、また、当研究所が役割を果たす上で、大きな貢献をして頂いたものと考えている。

全体を通じて、八木先生のご専門である稲作の経営問題に焦点を当てた視角から報告がされており、貴重な報告となっている。産業組織論の観点からコメ市場を考えると私の個人的な関心からは、規模が大きい組織経営体のシェアが増加するということは、他の産業分野におけるような利潤最大化に敏感な行動をする者が増加すると見ることもできる。利潤を左右する要素を抽出することによって、稲作の展開方向が見えてくる。八木先生をはじめ各委員がデータに基づき実証的に緻密に分析されており、今後の政策展開に当たってインプリケーションを与えるものである。また、日本の稲作だけでなく、海外の稲作の動向にまで目が配られている。

稲作をはじめ水田農業に実務的にも学問的にも関心を待たれているできるだけ多くの方に、本報告書に目を通して頂ければ幸いです。

平成30年8月

公益財団法人 日本農業研究所
理事長 田家邦明